

正宗白鳥

芥川龍之介論

芥川龍之介論

一

「処女作に於て、その作者の一生の作風は決定されている」

そういう意味のことを、ウエルスが云ったそうである。芥川氏は、氏がさほど感心していないウエルスについても、この言葉だけは同感であると云っていたのを、私は何かの雑誌で読んだことがある。

私が最初に読んだ、谷崎潤一郎氏の作品は「新思潮」

(?) に掲げられた「象」であった。芥川龍之介氏の作品で、はじめて私の目に触れたものは「孤独地獄」であった。この二つの作品は、それぞれに後年の二氏の芸術を予定させているようである。

夏目漱石に激賞されたため、芥川氏の出世作となったという「鼻」は、早くもこの作者の特色を現わして、人間の心理洞察の目と、諧謔ユーモアの才をそこに認めることが出来て、いかにも、漱石の好みになつていたのであるが、私正宗白鳥としては、この作者の他の一面を現わしている「孤独地獄」の方に心が惹かれた。

私は、年少の新作家のこの小品を読んだ時に、興味を覚えたのは、旧套を脱した芸術の萌芽をそこに認めただめではなかった。斬新な技巧の光に打たれたためではなかった。作中に語られている話が面白かったのだ。作者が母親を通して又聞きをした大叔父の話を、簡単明晰に、作者自身の主観をまじえて述べているのが、私の心にピツタリ嵌まったように感じたのであった。

彼の大叔父というのは、幕末から明治初年へかけての大通人山城河岸の津藤のことで、この津藤が吉原のある遊女屋で偶然近づきになった僧侶の心境を語ったのが、

五十年後に、年少作家龍之介の若い心に触れて、かの小品となった。

僧侶禅超は大通津藤に向って語っている。

「仏説によると、地獄にもさまざまあるが、凡先ず、根本地獄、近辺地獄、孤独地獄の三つに分つことが出来るらしい。それも……大抵は昔から地下にあるものとなっているのである。唯、その中で孤独地獄だけは、山間曠野樹下空中、何処へでも忽然として現われる。云わば目前の境界が、直ぐそのまま、地獄の苦難を現前するのである。自分は二三年前からこの地獄へ墮ちた。一切

の事が少しも永続した興味を与えない。だから何時でも一つの境界から一つの境界を追って生きている。勿論それでも地獄は逃れられない。そうかと云って境界を変えずにいれば、尚苦しい思いをする。そこでやはり転々としてその日その日の苦しみを忘れるような生活をして行く。しかし、それもしまいには苦しくなれば、死んでしまふ外はない。昔は苦しみながらも、死ぬのが嫌だった。今では……」

ここまで語って、禪超はまた三味線の調子を合せながら、低い声で云ったので、最後の句は、津藤の耳には入

らなかつたそうである。

年少作者龍之介は、この小話を述べたあとに、自己の感想を添加して、こう云っている。

「一日の大部分を書齋で暮している自分は、生活の上から云って、自分の大叔父やこの禅僧とは、全然没交渉な世界に住んでいる人間である。又興味の上から云っても、自分は徳川時代の戯作や浮世絵に特殊な興味を持ってゐる者ではない。しかし、自分の中にある或心もちは、動もすると孤独地獄と云う語を介して、自分の同情を彼等の生活に注ごうとする。が、自分はそれを否もうとは思

わない。何故と云えば、ある意味で自分も亦、孤独地獄に苦しめられている一人だからである。」

私は、かつてこの小話を通して、幕末の僧侶禅超の心境を想望したのであったが、今読直すとこの小品が、暗示に富んだ筆で津藤と僧侶とを描写しているのに気づいた。母親から伝聞したただのお話の記録ではないのである。

思うに、この材料を充分に駆使して、僧侶禅超の生理を、もっとと具象的に細叙したなら、遊廓の背景や脇師の津藤の通人振りとともに、絢爛にして凄惨なる名作が現

れた訳であつたが、芥川氏は、その短い人生行路に於て、
そういう材料を生かすほどの実験を心身に吸収し得なかつた。
……氏はかの小品に於ては、禪超の心の一端を瞥見して、
ある理解を試みたのに過ぎなかつた。津藤の言葉として
「これを嫖客のかかりやすい倦怠アンニユイだ」と解釈したりしている。
「酒色を恣にしている人間がかかった倦怠は、酒色で癒る筈がない」とも云っている。
そしてその後の十数年の作家生活の間にも、この材料を生かすほどの人生味は身に体し得なかつた。

「自分も亦、孤独地獄に苦しめられている一人だ」と

は、年少者が気まぐれに口にする感傷語とばかりは思われ
れない。芥川氏の脳裡に厳存していた感じであつたら
しいが、その感じが歳を取るにつれてどう働いていた
のであろうか。作品の上にどういふ風に現われていた
のであろうか。

二

小品「往生絵巻」も「孤独地獄」と同じような意味
私には面白かつた。……五位の入道は、狩りの歸りに、

或講師の説法を聴聞して、如何なる破戒の罪人でも、阿彌陀仏に知遇し奉れば、浄土に往かれると知って、全身の血が一度に燃え立つたかと思うほどに、急に阿彌陀仏が恋しくなつて、直ちに刀を引き抜いて、講師の胸さきへつきつけながら、阿彌陀仏の在所を責め問うた。そして、西へ行けと教えられたので、彼れは「阿彌陀仏よや。おおい。おおい」と物狂わしく連呼しながら、西へ西へと馳せていたが、やがて、彼れは波打際へ出て、渡るにも舟がなかった。「阿彌陀仏の住まれる国は、あの波の向うにあるかも知れぬ。もし身共が鶉の鳥ならば、すぐ

そこへ渡るのじやが、しかし、あの講師も、阿弥陀仏には、廣大無辺の慈悲があると云うた。して見れば、身共が大声に、御仏の名前を呼び続けたら、答え位はなされぬ事もあるまい。さすれば呼び死に、死ぬまでじや。幸い此処に松の枯木が、二股に枝を伸ばしている。まずこの松に登るとしようか」と、彼れは単純に決心した。そして松の上で、息のある限り、生命の続く限り「阿弥陀仏よや。おおい、おおい」と叫んで止まなかつた。……彼れはその梢の上でついに横死したのであつたが、その屍骸の口には、まっ白な蓮華が開いていて、あたりに異

香が漂うていたそうである。

この小品の材料は、この作者が好んで題材を取って来た今昔物語とか宇治拾遺とか云うような古い伝説集に収められているのであろう。その伝説が作者の主観でどれだけ色づけられているのか分らないが、私はこの小品を「国粹」という雑誌で読んだ時に、非常に興味を感じた。ことに「孤独地獄」と対照すると、芸術としての巧拙は問題外として、私には作者の心境が面白かった。孤独地獄に苦しめられているある人間が、全身の血を湧き立たせて阿弥陀仏を追掛けていると思うと、ふと、そこに私

の最も親しみを覚える人間が現出するのであった。しかし、これ等を取扱っている芥川氏の態度や筆致が、まだ微温的で徹底を欠き、机上の空影に類した感じがあったので、私は龍之介礼讃の熱意を感じるほどには至らなかった。

私は、この小品の現われた当時、その読後感がある雑誌に寄稿した雑文の中に書き込んだ……五位の入道の屍骸の口に白蓮が咲いていたというのは、小説の結末を面白くするための思附きであって、本当の人生では阿弥陀仏を追掛けた信仰の人五位の入道の屍骸は、悪臭紛々と

して鴉の餌食になっていたのではあるまいか。古伝説の記者はかく信じてかく書きしるしているのかも知らないが、現代の芸術家芥川氏が衷心からかく信じてかく書いたであろうかと私は疑っていた。芸術の上だけの面白ずくの遊びではあるまいかと私は思っていた。

こういう私の批評を読んだ芥川氏は、私に宛てて、自己の感想を述べた手紙を寄越した。私が氏の書信に接したのは、これが最初であり最後でもあったが、私はその手跡の巧みなのと、内容に価値があるらしいのに惹かれて、この一通は、常例に反して保存することにした。今

手許にはないので、直接に引用することは出来ないが、氏は白蓮華を期待し得られるらしく云っていた。「求めよ、さらば与えられん」と云った西方の人の聖語を五位の入道が講師の言葉を信じて疑わなかったと同様に、氏は信じて疑わなかったのであろうか。

私はそうは思わない。氏は、あの頃「孤独地獄」の苦をさほど痛切に感じていた人でなかったと同様に、専心阿弥陀仏を追掛けている人でもなかったらしい。芥川氏は生れながらに聡明な学者肌の人であったに違いない。禅超や五位の入道の心境に対して理解もあり、同情をも

寄せていたのに関わらず、彼等ほどに一向きに徹する力は欠いていた。

三

小説家として芥川氏は、新技巧派の一人として認められていた。氏は早くから文章家らしい文章を書いていて、幼稚なところも蕪雑なところもなかった。私は、新潮社出版の現代小説全集中の「龍之介集」を通読した時に、数十種の作品のうち、一つも出来損ねのないのに感心し

た。現代の文壇では稀れなる名文家であると思った。しかし、有島武郎の作品に清新なる技巧を見る如くには、芥川氏の作品から斬新な技巧を感受することは出来なかった。夏目漱石の作品のように明敏なる頭脳をもっているに趣向を凝らしているに關わらず、文章は在来の日本の文章のようである。「紅毛人の文学」に熟通しているらしいこの作者も、自己の文章には異国の情趣をあまり吸収してはいなかった。……私は、文章の形ばかりを云うのではない。形は新しそうに見えても、新しい生命がどれだけ通っているかと考察しているのである。

私は、氏を名文家として推讃するに躊躇しないが、傑
れたる新技巧家であるとは思っていない。それから、年
少にして孤独地獄を感じていた芥川氏も、人間を見る目
に於ては、つまり平凡な有り振れた人情を一步も出でて
いなかったことを、氏の作物を読みつづける間に痛切に
感じた。……これは、必ずしも氏を非難するのではない。
氏は平凡な人情を脱却して、人生宇宙の現象を見ようと、
いくらか藻掻いていたらしいが、その態度を徹底的には
持し得なかった。それだからこそ、氏の作品が世に迎え
られたのであるし、古今の多くの文豪も、つまりそこへ

落ちて安んじていたので、それでいい訳なのであるろうが、津藤によって語られて、芥川氏によって片鱗を描かれて、われわれの心にも映じている「孤独地獄」の主人公僧侶禅超の心境は、そんな生やさしいものではなかったに違いない。

試みに「蜘蛛の糸」を見よ。「杜子春」を見よ。あるいは、作者得意の切支丹物のうちの「おぎん」を見よ。どれも、美しく叙述された物語である。そして、どれも有り振れた人情に雷同して作為された物語である。「蜘蛛の糸」の犍陀多は、生前の悪行のために地獄の底に墮

ちていたが、ただ一度蜘蛛の生命を助けたことがあったのが、お釈迦様の記憶に浮んで、その善行のむくいとして、地獄から救い出されることとなって、お釈迦様の手から一筋の蜘蛛の糸が、その地獄の底へ下ろされた。犍陀多はその糸を見つけると歡喜して、それに縋って天上へ上りかけたが、他の多くの罪人も彼れに習ってその糸に貼りついた。彼れは多人数の重みで糸の中断することを恐れて「この蜘蛛の糸はおれのものだぞ……下りろ下りろ」と喚いた。すると、その途端に、蜘蛛の糸はぷつりと切れて、犍陀多は真逆さまに暗の底へ落ちてしまっ

た。……つまりは、自分ばかり地獄からぬけ出そうとするこの男の無慈悲な心が、その心相当の罰を受けたというのである。作者はここで、極り切った秩序ある世界をやすやすと受け入れて、そこに何等の懷疑の苦をも感じていない。書振りが童話として書かれたらしく思われるが、作者の心持までも童話の世界に安んじている。私はこの頃「ガリバア旅行記」を読み直したが、ここに描かれた童話の世界を見詰めていると、寒風に肌のつんざ撃かれる思いがされる。それに比べると、「蜘蛛の糸」などの童話の世界は、ストーブで温められた温室的書齋での仮

寝の夢に過ぎないように思われる。……無論温室の夢も芸術として価値があるのに違いない。私は「蜘蛛の糸」をも愛読した。只、私は「孤独地獄」や「往生絵巻」以来、芥川氏に対しては、世界の文壇の常套的芸術以上のものを期待していたために、不満を感じたのである。

「杜子春」は支那の伝奇の翻案とも云っていいもので、龍之介集中の傑作の一つであるが、型の如くに事が運んでいて、「私は仙人にはなれません。しかし、私はなれなかつたことも、反って嬉しい気がします。ですから、いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を

受けている父母を見ては、黙っている訳には行きませんが」と、杜子春は最後に夢から醒めたように云って、「何になっても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と、誓いを立てている。……こういう程度の人、人間らしさに、作者は人間を見たつもりで、また自己を見たつもりで安んじていたのであるか。それなら、禅超の「孤独地獄」の悩みは、そこになかった訳である。

「おぎん」は、自分一人天国の門へ入るよりも、天主のおん教えを聞く機会のなかったために地獄へ墮ちている筈の両親の跡を追って、自分も地獄へ落ちようと決心し

て切支丹の教えを棄てた。……作者はここでも人情に安んじた。読者もここに描かれた人情に感動して涙を落すのである。

芥川氏は、屢々題材を古伝説から取来って、人情を説いている。温室のなかで文学読者を集めて、巧みな言葉で人情を説いている。「山間曠野樹下空中、何処へでも忽然として現われる」と、禅超の云った「孤独地獄」は、その温室に於ける作者の眼前には現われなかったのである。無論温室の屋外に、幾億万由旬に渡って吹きすさんでいる寒風は、作者の耳には響かなかったのである。

四

芥川氏は、切支丹物と称せられる変った物語を幾つも創作して、読書人の注意を惹いた。自然主義以来の常套に習って、凡庸貧弱な自己の日常生活を書く外に能の多い多くの新進作家に比べると、芥川氏の態度は、遙かに賢明であつた。芸術的天分の傑れていたことも証明される。そして、氏は、それらの古い物語を、ただの古い物語として書いているのではない。それ等に於て、いろいろ

ろに人間の心の動きを洞察しているのだ。芸無しの身辺雑記作者以上に、自己の心をそこに現わしているのだ。

「奉教人の死」「るしへる」「おしの」「きりしとほろ上人伝」など、いずれも完成したる芸術品である。「保吉の手帳」など、作者自身の現実の生活記録よりも、一層よく作者自身の面目を現わしている。（私は、保吉という男を主人公とした小説は概して芸術価値の低いものだと思っっている）しかし、切支丹迫害時代の壮烈悲痛の逸話を取扱いながら、稍々もすると、一般の人情の発露、あるいは逆説的心理の摘出を試みたに止まっているの

に、私は多少の遺憾を覚えている。作者は「孤独地獄」の苦悩の一端を覗いたに過ぎなかつたと同様に、迫害された切支丹信者の壮烈悲痛の心境、あるいは夢幻的歓喜の境地に、自己の心を浸染させていたのではなかつた。……文学はそれでいいので、文学の本領はそこにあるのかも知れないが、そうすると、文学は要するに智慧の遊びに過ぎないように思われる。

智慧の遊びとして、芥川氏の技巧の妙を見るべきものは、切支丹物は「報恩記」を最上とする。「藪の中」など二三、同じ趣向の立て方を試みたものがあるが、「報

「恩記」に於て、最もよく作者の芸術的手腕の冴えを見せている。傑作の一つである。

しかし、これよりも、一層傑れていると思われするのは「地獄変」である。私は自分が読んだ範囲内では、この一篇を以つて、芥川龍之介の最傑作として推讃するに躊躇しない。明治以来の日本文学史に於ても、特異の光彩を放っている名作である。氏の多くの切支丹物や、平安朝物は、智慧の遊びに過ぎないところがあつて、一度は着想と奇才に感歎しても、二度三度繰返して読むと興味索然たることもあるが、「地獄変」は今度読み返して一

層深い感銘を得た。芥川龍之介の持って生れた才能と、数十年間の修養とがこの一篇に結晶されている。聡明なる才人の智慧の遊びではない。心熱が燃えている。夏目漱石や森鷗外に似て、いくらか型が小さいように思われるところが無いが、この「地獄変」一篇は、鷗外漱石の全集中にも断じて見難いものであると確信している。私は芸術の上からのみ批判してこういうのではない。「孤独地獄」や「往生絵巻」に一端を示したこの作者の心境がここでは渾然として現われているのに、ある尊さをさえ感ずるのである。……私は芥川氏の日常生活

を知らない。氏が家庭に於て社交に於て、どういふ言葉を口にし、どういふ行動をしていたか知らないが、そういう外形の生活はどうであらうと、氏が、良秀の「地獄変の屏風」完成の由来をここまで見たことは、氏自身が持って来た心力の限りを盡くして、世界を見たようなものである。……普通の人情や逆説的心理の摘出にのみ拘わっていた氏も、ここでは仮面を脱した人間生存の姿を見たようなものである。「現代小説全集」の目次を開いて見ると、「地獄変」の作られたのは大正七年のことである。氏が三十歳に達した頃であらう。そんなに若くつ

て、こういう大作を著わしたことに、私は驚歎している。氏の如き神童型の作家の晩年は自から推知されるが、最近数年間の氏の作品に、私は痛ましき衰顔の影を見ていた。「改造」に連載されていた文芸評論などは、多くは氏の頭脳の混乱が示されていた。

五

曲亭馬琴を題材とした「戯作三昧」のなかに、銭湯の中で、入浴中の馬琴に当りちらしている男の言葉として、

「第一馬琴の書くものは、ほんの筆先一点張りでげす。まるで腹には何もありません。あれはまず寺子屋の師匠でも云いそうな、四書五経の講釈だけでげしよう。だから又当世の事は、とんと御存じなしさ。それが証拠にや、昔の事でなけりや、書いたというためいはとんとげえせん。お染久松がお染久松じゃ書けねえもんだから、そら松染情史秋七草さ。こんな事は、馬琴大人の口真似をすれば、そのためしさわに多かりでげす」と云っている。

作家の好みはさまざまである。お染久松を「松染情史」として書こうとも、自己の生活の直写をしないで、平安

朝物や切支丹物に於て人間を書こうとも、それは作者の自由である。しかし、芥川氏は、現代の写実にも、可成りに傑れた技倆を現わしている。「秋」には若い姉妹の心の動搖が巧みに描かれている。ことに「一塊の土」はいい。「地獄変」と相並んで、この作者の全作中で、最高位に立つものである。お民という田舎女の忍苦の生活には、作者自身の心が動いている。そして、自然主義系統の作家の作品に比べると、秩序整然として冗談がない。……私は数年前「新潮」に掲げられたこの小説を、故郷で読んだ時、芥川君もこんなに現代の写実に巧みで

あるのかと感歎して、直ちに読後感を書いて「文芸春秋」に寄稿したことがあった。……しかし、この小説以後の芥川君の作品には殆んど一つも感心しなかった。

谷崎潤一郎氏の芸術観には、強い自信が現われている。力がある。芥川氏には、頭脳の混乱が現われ、懷疑の悩みも見られる。谷崎氏は、かつて、熊谷直実が、浄土のある西方に背を向けるのを憚って、逆さまに馬上に跨って歩を運んでいたその敬虔なる心構えに感服し、自分にはそういう宗教心はないが、芸術の美に没頭して安んじているという意味の感想を、ある雑誌に述べていたが、

芥川氏はそういう芸術至上主義者ではなかった。禅超や五位の入道や良秀について無関心ではいられない人であった。私が以前から氏の作品に共鳴を感じていたのはその点であった。

聡明であった氏は、谷崎氏のような自信を欠いていたのであろう。自己批判に疲れたのであろう。

（昭和二年八月八日 軽井沢にて）

日本文学電子図書館

芥川龍之介論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「文壇人物評論」中央公論社

1932年7月20日 印刷

1932年7月25日 発行

日本文学電子図書館